

● SCフライブルクのサクセスストーリーにふれて

団員 向田 将央

フライブルク市はドイツ連邦共和国南西部、フランスやスイスの国境近くに位置し、「キリスト教世界でもっとも美しい塔」のある大聖堂を持つ町である。また、「環境首都」の名を持っており、環境先進国のドイツでも、いち早く環境保護政策を進め、その政策はトップクラスの徹底ぶりである。



(シュバアルツヴァルト・シュタディオン外観)

SCフライブルクは1904年に創立された歴史のあるサッカーチームで、ホームスタジアムは、市の東部にある。スタジアムの名は「ドライザーム・シュタディオン」であったが、現在はネーミングライツにより「シュバアルツヴァルト・シュタディオン」といい、25,000人収容。当初の名称であったドライザームというのは市内を流れる川の名前で、その名は三つの小川が市内で合流して大きな流れになることに由来しているようである。

今回案内していただいたのは、コミュニケーション・メディア担当のアンディロウ・クラフトさん、育成施設長のアンドレアス・シュタイアートさん。お二人に、チームの歴史、概要、スタジアム等についてレクチャーを受け、施設内を見学させていただきました。



(クラフトさんとシュタイアートさん)

SCフライブルクは小さな同好会から始まったサクセスストーリーのチームである。現在2部（昨季は1部所属）の2位で1位を目指して頑張っており、昨年のチームの売上は7000万ユーロ（約90億円）、税抜きで1300万ユーロ（約17億円）とのことであった。これは他のチームに比べてかなり少ない額のようなのだが、そんなファイナンスの面で厳しく小さなチームでも、「ブンデスリーガ」の1部に上がってこられたのは、フライブルク及びSCフライブルクの「歴史」こそが、市民、サポーターの励みとなり原動力になっているとのお話があった。スタジアムの移転に関する住民投票では、ほとんどの市民が賛成をしたのも理解できた。

フライブルクには創立当時、圧倒的な実力と人気を誇ったフライブルガーFCというサッカークラブが存在していたために、SCフライブルクはフライブルガーFCの陰に隠れた存在であった。それにも関わらず、ここまでに至った経緯には、1980年頃の会長の采配と、小さな活動をコツコツと示し続けた結果の賜物であり、その一つに2001年に設立した選手育成のスクールがある。地元の子供を良い選手に育てるとの考えのもと、授業料を無料にし、全ての子供にチャンスを与えることで、後のビッグスターが誕生することになる。そのスターの契約料で利益を得て、またスクールの運営も潤う。事実、SCフライブルクのレギュラー選手11人のうち5人は当スクール出身者であった。

SCフライブルクが市からの財政援助を少な目に心掛け、育成型のチームづくりをしている背景には、この環境政策との関係も大きいように思う。しかし、フライブルク市の環境政策とSCフライブルクとの関わりは、それだけではない。



(VIP ルームでのレクチャー)

このスタジアムの屋根は、一面が太陽電池で覆われており、また練習場などには広告板のように太陽電池パネルが立てられている。汎用太陽電池パネルがドイツに普及し始めた頃、いち早くこの

スタジアムはパネルを設置。この発電システムで作られた電気のうち、設備に使用した分を除いた余剰分は電力会社等に売却し、運営資金に充てられている。また、太陽電池を設置する家庭には市から補助金が出るが、そのほかにSCフライブルクホームゲームのチケット優先枠を提供されることもある。スポーツクラブが市の環境政策を実行する先導役となっているのは、文化として根付いている一つの証拠だと思う。

長年にわたっての黒字経営、多くの名選手を生み出した選手育成、環境に優しいスタジアムなど、ドイツサッカー界でも模範的なクラブとして高い評価を得ているのが今回の視察でよく分かった。

田舎の同好会から始まったSCフライブルクが国際的なヨーロッパリーグで活躍するようになったのは、決して奇跡ではなく、チームが環境都市の率先役となり、市が応援し、市民が育てた結果であり、規模が小さいながらも高い評価を得ているSCフライブルクの運営は大いに参考となった。我が愛媛FCがJ1リーグで活躍する未来を想像し、それが松山の明るい未来に繋がるであろうと確信できた有意義な視察であった。



(スタジアムにて集合写真)